高尾山法類会

去る六月二十二日、高尾山の縁故寺院の集まりである高尾山法類会が、八王子市内の割烹・伊奈喜で開かれ、大勢の参加者が集まり、和やかな雰囲気の中で法類会が行われました。

飯沢執事の挨拶により開会され、続いて岸本法類会長の挨拶を頂きました。その後議事は進行され、新人会員の栃木北部教区・普濟寺・高橋秀城住職と東京多摩教区・金南寺・上村公昭住職、東京多摩教区・萩の寺・飯沢隆秀住職が紹介されました。

その後の懇親会において、参加者は歓談のひと時を過ごされました。

法類会の様子

成田山勧学院生来山

真言宗智山派・大本山成田山にある、僧侶の育成を目的とした勧学院の修行僧が、六月八日、高尾山に来山されました。

一行は特別大護摩供修行にて、修行の無魔成満を祈念されました。

成田山勧学院は、総本山智積院にある、智山専修学院と同様に、多くの優秀な僧侶を卒業させています。

奉納御礼

有喜苑仏舎利塔塗装事業

このたび、㈱エース・リフォーム様の御奉納によりまして、五月十八日から六月八日にかけて有喜苑仏舎利塔の外壁塗装工事が行われました。

㈱エース・リフォーム様は長野県・山梨県を中心に企業活動されており、創業以来「一塗懸命」をスローガンとして掲げ、地域貢献として塗装ボランティアを続けられております。

平成二十六年に八王子支店を開業されたことから八王子市内でもボランティアが行われるようになり、今回御縁を頂きまして仏舎利塔塗装工事の運びとなりました。

仏舎利塔の塗装工事は平成十三年以来となります。今回の工事で再び美しい白亜の仏舎利塔へと生まれ変わりましたので、高尾山へ御参拝の折には是非ともお立ち寄りください。

茲に重ねて御礼申し上げます。

陽光に輝く白亜の仏舎利塔

おはなし散歩道

さなぎのカケル

町田市　大澤桃代

さなぎのカケルは動けない。一人、硬くなった体で幼虫の日々を思い出していた。

カケルは小さかったが、すばしっこかった。

秋の日、落ち葉の中を転がって遊んだ。「カケルは早いな！」目の大きなヒカルが言った。仲間はたくさんいたがカケルにはヒカルが一番だった。果物を見つけては二人で食べた。

ある日、二人で枯れ葉に潜っていたら穴に落ちた。土の中の曲がりくねった道で、もぐら道だとわかった。もぐらは天敵だ。見つかれば食べられる。ヒカルがもぐらの後足を見つけ、分かれ道に潜り込み息を潜めた。もぐらはミミズを襲っていた。泣きながら、ひたすら土をかき分けて逃げた。

冬は土の中で過ごした。「温かいね」ヒカルが言うと「ヒカルがいるから」カケルが答えた。春が近づくと、仲間が一人、また一人と上へ登って行った。大きくなった順にさなぎになる場所を探しに行くという。皆さよならも言わずに登って行く。「登る時は自然とわかる」ヒカルは言った。

本当だろうか。

――さなぎには、なれないかもしれない。

カケルは思った。仲間内で一番小さいのだ。一人になればもぐらに襲われる気がする。カケルは無口になった。不安が伝わったように、ヒカルも黙りこくった。

やがて、二人だけになった。ヒカルの体はカケルの倍にもなった。見えない鎧をまとっているように、話しかけても、ヒカルはしゃべらない。それでも、カケルは決めていた。別れの日が来たら、ヒカルにさよならを言おうと。二人あんなに楽しい時を過ごしたのだ。

とうとう、その日がきた。ヒカルが一瞬カケルを見た。その背中にカケルは「さよなら」と叫んだ。ヒカルは振り向かなかった。

どれくらい経ったのだろう。カケルは無性に動きたくなった。土の向こうにもぐらの気配がする。逃げなければと思うが、体が勝手に上へ横へと動く。もぐら道をかすめた時、生きた心地がしなかったが、上へ行けばヒカルに会えると思った。

ところが回りに空間ができるとカケルの体は動くのを止めてしまった。上へと行きたいのに、体は勝手に空間を踏み固めて壁を作る。

なぜ？ヒカルも仲間も登って行ったのに。このままではもぐらに襲われるかもしれない。カケルは泣いた。

泣きながらヒカルとの思い出を辿っていた。

気がつくと頭がひどく痛んだ。カケルは眠る。深く、深く。

登らなければ！カケルは体の内側からこみ上げてくる衝動を感じた。長いこと眠っていたようだ。体の外でバリッと何かが破れたが、かまわず登ってゆく。もぐらがあきれたように眺めていた。

風を感じた瞬間、目の前に雑木林があった

甘い匂いがする。いつかヒカルと食べた桃の匂いだ。体を見ると、黒く輝き、頭には立派な角が生えていた。

飛ぶ！思うと同時にカケルは飛んでいた。「カケル！立派なカブトムシになったね！」

桃畑から、大きな目のヒカルが飛んできた。「遅いから心配してたんだよ。立派な角だね、仲間の中で一番だ」

辺りを見回すと、桃の幹に仲間たちがいた。

「カケルは、ゆっくり大きくなったんだね」と、ヒカルが言った。

（完）

（さし絵・小出　茂）